

## 1. はじめに

## 言語現象

\* 英語には、副詞が単独で先行発話に対する応答として使われる場合がある。

\* (1)は兄弟 (Tim と Will) の会話で、二人は雨が降っていなければ釣りに出かける予定である。Tim は先に今の天気を確認している。やってきた Will に対して(1a)のように発話する。

- (1) a. Tim: It's raining outside.  
b. Will: Really?  
c. ~~Is it really raining outside?~~

\* Will は(1b)のように応えることができるだろう。本発表ではこのような、副詞 really が単独で用いられる応答文を「副詞応答文 Really?」と呼ぶことにする (Stenström (1986)が談話分析的アプローチで interact と呼ぶ用法である)。副詞応答文 Really?は、大抵(1c)で示しているような先行文の命題の真偽を確認する省略文として理解することができる (Paradis (2003)はこのような用法を truth-attesting と呼んでいる)。しかし、このような方策では理解できない表現がある。

\* (2)も兄弟 (Tim と Will) の会話で、二人は父から雨ならば図書館に行つて勉強するように言われている。二人ともいやがっている。しかし父はよく言ったことを忘れてしまう。兄弟は今雨が降っていることを知っている。そこに父がやってくる。そしてうっかり Tim は(2a)のような発話をしてしまう。

- (2) a. Tim: It's raining outside.  
b. Will: Really?  
c. ~~Is it really raining outside?~~

\* Will の(2b)の発話は表面上(1b)と同じ副詞応答文 Really?であるが、これは(2c)のように解釈されない。Will も雨が降っていることは知っているからである。

**主張** (発表では主に経験的な側面に焦点を当てる)

- (3) a. 副詞応答文 Really?には、発話者 (行為者の) の発語 (あるいは非言語) 行為を命題化して質す機能・使い方がある。  
b. 副詞応答文 Really?が質すのは、(復元あるいは想定される) 命題の文字通りの真偽ではなく、命題 (発語・非言語行為) によって達成されると話者・行為者が想定していると考えられる推意や発語媒介行為である。

\* 推意や発語媒介行為は、発話の一部になっていない。それにもかかわらず副詞応答文の Really?が推意・発語媒介行為に言及することができるのは、関連性理論で仮定されている関連性の伝達原理によるという分析を試みる。

\* (2)のデータに戻ると、Will の副詞応答文 Really?は、Tim の発話全体をメタ言語的に命題化し (あるいは発語行為動詞を復元し)、その行為の真偽を(4)のように質していると解釈できる。(2)と(4)の例文は informant work による。)

- (4) Are you really telling Dad that it's raining outside?

\* しかし実際(4)で質されているのは、telling Dad that it's raining outside という命題だけではない。今 Tim はまさしくその発話を行ったのであり、それは Will も明らかに認識している。実際 Will が問

題にしたいのはその明白な行為がもたらすであろう結果（例えば父に雨が降っていることを知らせること、とか図書館に勉強に行かなければならなくなる）であると思われる。

## 2. 先行研究

**Quirk et al. (1985: 628)** 記述的

- (5) a. A: I'm going to resign.  
b. B: Seriously? [Were you speaking seriously when you said that?]

\* (5)は、発語行為をメタ言語的に命題化し、それを seriously が修飾するという分析である。以下ではこの分析を really に応用して副詞応答文の機能を考察する。

\* Quirk らは {seriously speaking/speaking} の差を説明していない。あるいは直感に任せている。この部分を以下の議論で明確にする。

**Wilson and Sperber (1993)** 関連性理論

\* (6a)の seriously のような態度副詞が、(高次表意のレベルで) 発語行為動詞を修飾するという分析をしている。

- (6) a. Seriously, I can't help you.  
b. Mary told Peter seriously that he can't help.

\* 副詞が発語行為動詞なしでも事実上発語行為動詞を修飾することが可能であるという事実が少なくとも確認されている。

\* しかし、本発表で問題にしている副詞応答文 Really? のような、単独での使われ方には言及がない。

\* また、seriously の有無による意味の考察がない（実際 really や seriously の有無は命題の真偽を左右しないように思える）。

**松岡 (2001)** 関連性理論

\* 本発表で、副詞応答文 Really? と呼んでいる表現を、back-channel として用いられる間投詞的な用法と分析している。

- (7) a. Peter's a genius.  
b. Really?  
c. The speaker is questioning the truth that Peter's a genius.  
(高次表意)

\* 具体的には(7b)のような Really? が、省略形とは考えず(7c)のような高次表意を作るように手続き的にコード化されているという主張をしている。

\* しかし、副詞応答文 Really? は、(1c)と(2c)で見たように構造的な曖昧性を示すので、間投詞という分析は不十分であると思われる。ただし、後に見るように松岡 (2001)には、本発表の提案する分析、あるいはその分析の方向性が示唆されている。

## 3. 追加例文

\* 追加例文として3種類を挙げる。

- (8) a. 先行発話の発語内行為を命題化し、その適切性を質す。((4)がすでにその例となっている。)  
b. 先行発話の語句の選択を命題化し、その適切性を質す。  
c. (非言語的) 意図明示的伝達行為を命題化し、その適切性を質す。

\* どの場合も命題自体が真であることは話者にも聞き手にも明らかであるので、実際に質されているのは命題の真偽ではなく、その推意あるいは発語媒介行為であることも注目していく。

\* はじめは、先行発話の発語内行為を命題化して、その適切性を質している例の追加である。映画から採取している。Brady は運動好きで、Mack は運動も好きな反面、勉強もまじめにする。この場

面の前で、Brady は Mack が勉強好きの Spencer と仲良くしているのを見て、少し喧嘩をしている。しかし Spencer と Mack が特に仲が良いわけでもないし、そのことを2人とも理解している。今、(これとは関係ないことで) Brady と Mack は言い争いをしている。Brady は、「頭のいい Spencer に助けてもらおうか」と2人の関係を皮肉る。

(9) Brady: I don't know! You could've been a little less direct.

Mack: Less direct, like, kept it a secret from her? Kept her in the dark? Yeah, 'cause that's been working so well for you, lately.

Brady: Well, maybe we should go ask Spencer for help.

Mack: Really? We're back to that.

(1:06:30-, Teen Beach 2, Walt Disney Studios Home Entertainment.)

(10) a. ≠ ~~Should we really go ask Spencer for help?~~

b. = ~~Are you really suggesting that we should go ask Spencer for help?~~

\*まず、(10a)のように、「すべきかな?」と発話者に聞いているのではない。Brady は、本気で Spencer に相談すべきだと言っているのではない(2人はそもそもそういう関係ではない)。そのことは Mack もわかっていて、だからこそ「その話に戻るの?」とすぐに言っている。

\*つまり、(10b)のような発話内行為を修飾する really と分析するしかない。

\*しかし副詞応答文 Really?が質しているのは、その提案をしていることそのものではない。Brady の発話は皮肉であってそれによって Brady は「自分ではなく Spencer の方を信頼しているのであろう」と推意させている。またその発話で Brady は、今言い争っている問題ではなく Spencer の話題に戻ろうという発話媒介行為が遂行されている。副詞応答文 Really?が問題にしているのは、こうした推意や発話媒体行為である。Mack が Really?の直後に、We're back to that と発言し、これを言語化している。

\*次は、先行発話の語句の選択を命題化し、その適切性を質す例である。若い2人の男女の会話である。

(11) Mack: Hi.

Tanner: Hi.

Mack: Uh, do you mind if I join you?

Tanner: Of course not. I'd wanna join me, too. So, hey, you know, I've never seen quite a chick like you.

Mack: Chick? Really? Hold on while I lay some eggs.

(41:15-, Teen Beach Movie, Walt Disney Studios Home Entertainment.)

(12) ~~Are you really referring to a girl as a chick?~~

\*Tanner に相談があってやってきた Mack のことを Tanner は chick (like you)と呼ぶ。これに対し Mack はこの言葉遣いを really で質している。

\*この場合、先行文中の単語の使い方を問題にしているので、先行文の命題をそのまま使うことはできない。(12)のようにメタ言語的に発話者が行ったこと(単語の選択)を心的に命題化して、その一部として really が使われていることを想定し、さらにその命題文が省略されたと分析することができる。

\*その際、副詞応答文 Really?が質しているのは、発話者の行ったこと(女性を chick と呼んだこと)そのものではない。なぜなら、実際その行為に及んだことは聞き手も発話者もわかっているからである。

\*Really?は、Tanner が女性一般を chick と呼ぶことで達成されると Tanner が考えていると思われること(例えば、女性が男性に対して従属的な社会的立場であるという世界観の提示)を疑問視していると解釈できる

\*最後は(非言語的)意図明示的伝達行為を命題化し、その適切性を質す例である。

\*女性の気を惹きたい男性 Ned が peacocking (派手ないでたちとふるまいで異性の気を惹く)をする。それに対して女性(校長先生)が副詞応答文 Really?を用いる。

- (13) Ned: Watch.  
Principal: Are you peacocking? Really? You think that's gonna work?  
Ned: I think it just might.

(49:00-, Seventeen Again, Warner Home Video.)

- \*この例では、女性は Ned が実際に行っている（非言語的）意図明示的伝達行為を Are you peacocking? と疑問文化して、その適切性を副詞応答文 Really? で質している。
- \*先行する発話がないので、これは明確に副詞応答文 Really? が状況を命題化し、その真偽を質す用法があることを示している。
- \*さらに、Really? に続いて、この行為の適切性を質す文 You think that's gonna work? が続いている。

- \*この例では、（非言語的）意図明示的伝達行為が Are you peacocking? と言語化されているが、次の例ではそれもなく、副詞応答文 Really? が完全に単独の形で用いられている。
- \*Wilde は人気若手歌手で、女の子は誰でも自分の歌を聴きたがっていると思っている。Jessica はある理由で Wilde にたまたま車で送ってもらっている普通の高校生である。Wilde のことをもちろん知っているが、好きではない。Wilde は自分の CD を流して、自分の歌を（よかれと思って）歌い出す。それに対して Jessica は really? としている。

(14) Wilde: (Singing) There's something about the sunshine, baby. I'm seeing you in a whole new light.

Jessica: Really? (26:20-, Star Struck, Walt Disney Studios Home Entertainment.)

(15) Are you really singing your song?

- \*really によって行為が(15)のように命題化され、さらに省略があると考えることができる。
- \*また、歌っているのは明らかなのでそれ自身の真偽を問うというよりは、問題にされているのは歌を歌うという行為によってもたらされると Wilde が想定していると考えられる、いふなれば行為媒体行為（聞き手がそれを喜ぶこと）であると分析できる。

#### 4. 説明

- \*ここまでの副詞応答文 Really? の意味は2つの仕組みで記述できる

- (16) a. 発語行為・非言語行為をメタ言語的に想定して命題化し（疑問形で）修飾する。  
b. 行為自体の事実関係ではなく、行為によって成し遂げられることの適切性の当然視を質す。

- \* (16a) は、Quirk et al. (1985) で指摘されたとおりである。（後で関連性理論による説明を試みる。）

- \* (16b) に関しては、次を考えてみたい。

- (17) a. Sam is really saying that the earth is warming.  
b. Sam is just saying that the earth is warming.

- \* これらの真理条件はどちらも同じであると思われる。Sam が「the earth is warming」と言っている限り、really でも just でも命題は真である。

- \* just saying をインターネット上の口語英語辞書サイト urban dictionary で調べると、2番目に次のような定義が出てくる。

- (18) just saying  
a. Definition: There is an obvious implication of what I just said, but I formally disavow that implication, although I actually believe it.  
b. Example: That might be the wrong tie to wear. Just saying.  
(Implication: It makes you look ridiculous.)

- \* just saying は、発話の文字通りの意味は否定しないものの、その推意に責任を持たないと正式に宣言する表現であるという（この記述は English Speaker に内容を確認してもらっている）。

- \* really saying は、この逆、つまり発話内容から引き出される推意や、発話媒介行為まで責任を持つこと

を明言する表現であると考えられる。

\*おそらく *seriously speaking* や *really saying/just saying* も誰でもなんとなく意味がわかっていると思われるが、推意や発語媒介行為で考えるとすっきりと整理されるように思われる。

\* *Quirk* の(5b)の *seriously* も、その発話の推意や発語媒介行為までも責任取る気がある発言であるのか、それともただ言っているだけなのかを質していると解釈できるのではないか。

\*すると副詞応答文 *Really?*は「発話から引き出される推意や発語媒介行為にまで責任を持つか」を質していると分析できることになる。

\* (19)の *mean it* も同様と思われる。

(19) I am sorry. I mean it.

\* 謝る場合、普通その結果、言動を改めるとか、少なくとも申し訳ない気持ちを持ち続けるとかなどの推意、発語媒介行為が生まれる。しかし、ただその気も無く *I am sorry* と口先だけで言う場合もある。*I mean it* と追加することで、これはそうではない（推意、発語媒介行為まで含めて責任をもって発話している）旨を伝えられる。副詞応答文 *Really?*はそうした態度を疑問視すると解釈できる。

\* (1)のように先行発話の命題内容の真偽を質す副詞応答文 *Really?*もあるのですが、ある場合には、*really?*が2つの解釈で曖昧になる場合があると予測され、事実そのような例が見つかる。

\* *Sharpay* と *Ryan* は双子の姉と弟で、いつもミュージカルで共演している。今、*Sharpay* は、*Ryan* の代わりに別の男性をミュージカルの主役に抜擢しようとしていて、その代わりに、別の役を *Ryan* に与える申し出をしている。*Sharpay* は、見ての通り、これが *Ryan* にとって良い知らせ（喜ばせるような話）として伝えている。

(20) *Sharpay*: But in the meantime, keep an eye on those Wildcats. If they're planning on being in the show, which I doubt, once they hear about Troy and me, I don't want any surprises. Oh, and don't worry, I'll find a song for you somewhere in the show. Or the next show.

*Ryan*: *Really?* Don't strain yourself, slick.

(1:01:50-, *High School Musical 2*, Walt Disney Studios Home Entertainment.)

(21) a. Will you really find a song for me somewhere in the next show?

b. Are you really proposing to find a song for me somewhere in the next show?

\* *Ryan* はもちろん、この話で喜ぶはずが無い。しかし *Ryan* の副詞応答文 *Really?*は(21a)の先行発語命題を質しているという読みが可能である。この場合、推意として「本当に別の歌を歌わせてくれるんだ、嬉しいな」という推意が *Sharpay* に伝わるであろう。しかし、発語行為を質す解釈(21b)の場合、そんな提案をすれば自分が喜ぶとでも思っているのか、という推意・文脈効果を疑問視しているとも考えることも可能である。

\* 映画はこの揺れを利用して、*Sharpay* は、「*Ryan* が喜んでいるんだから、これでいい」というように解釈し（*Sharpay* は表情でそれを表現している）、逆に *Ryan* は「そんな扱いなら、もう *Sharpay* とは共演できない」という気持ちを抱いたことを視聴者に伝えている。事実この後の展開で、*Ryan* は、*Sharpay* のライバルと共演して、そのことが *Sharpay* を驚かせるという展開になる。

\* 最後に推意や発語媒介行為という音声化されていない内容が、どうして副詞 *really* によって修飾が可能であるかを考えてみたい。

\* これは関連性理論の関連性の伝達原理によると考えることができる。

\* 関連性理論では発話や単語の選択、また非言語的であっても意図明示的伝達行為は、それ自身最適の関連性の当然視を自動的に伝えると想定されている。

(22) Communicative Principle of Relevance

Every act of ostensive communication communicates a presumption of its own optimal

relevance.

(Sperber and Wilson 1995: 260)

\* (22)は発話に最適の関連性の当然視(23)が備わることを一般化している。

(23) Presumption of optimal relevance

b. The ostensive stimulus is the most relevant one compatible with the communicator's abilities and preferences.

\* 聞き手にとって関連性とは、positive cognitive effect のことであり、(帰結) 推意を含めた文脈効果、さらにいえばそこから派生する発語媒介行為である。したがって副詞応答文 Really は、発話（や発語行為、意図明示的伝達行為一般）の持つ当然視された関連性(23)を質していると考えることが可能であろう。

\* 意図明示的伝達行為やそれを命題化したものは、それらが持つ認知効果が自動的に保証されているというのが(23)の趣旨である。なぜ副詞応答文 Really? が音声化されていない事柄を質することができるのかというと、音声化された部分のうちに自動的に付与されていると一般化されている関連性の当然視が質されていると解釈することができるからであると考えられる。

\* 松岡 (2001)は(7)で見たように、副詞応答文 Really? を手続き的なコード化を持つ単語として分析して、本論の主張とは違う。しかし、松岡は(24)のように論文を締めくくっている。

(24) 関連性の枠組みでは、全ての意図明示的伝達行為は最適な関連性を見込みを伝達するところである。通常は言語形式として顕在化される必要のないこの最適関連性を見込みの伝達という無作為の行為を、今回見たような really の用法は自覚的に顕在化させるものであるように見えるが、本稿で述べたのと同様の機能を有するような他の副詞句をも一括する総合的観点からなる考察とその範疇化はさらなる課題としたい。

(松岡 2001: 26)

\* 関連性理論以外でも、Joshi (1982: 190)や Hirschberg (1985: 12)は Grice (1989)の協調の原理の制約範囲を、発話そのものから発話から導かれる推意にまで広げる提案をしている。この考え方では、発語内行為動詞を修飾する really が協調の原理を遵守していることを明言する表現と分析することができる。Levinson (1983: 163)も、well、oh、ah、so、anyway、you know のような例を挙げながら語句の意味記載に推意への言及が必要となる場合がある可能性を指摘している。

\* どうもありがとうございました。

## 参考文献

- Bach, K. and R. M. Harnish. 1979. *Linguistic Communication and Speech Acts*. Cambridge, Massachusetts: MIT Press.
- Hirschberg, J. B. 1985. *A Theory of Scalar Implicature*. Doctoral dissertation, University of Pennsylvania.
- Joshi, A. K. 1982. "Mutual Beliefs in Question-Answer Systems." In N. V. Smith (ed.), *Mutual Knowledge*, 181-197. New York: Academic Press.
- Levinson, S. C. 1983. *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 松岡信哉. 2001. 「really の間投詞的用法—概念的/手続き的な意味の観点から」『語用論研究』3, 16-27.
- Paradis, C. 2003. "Between Epistemic Modality and Degree: The Case of *Really*." In F. Roberta, P. Frank and K. Manfred (eds.), *Modality in Contemporary English*, 191-222. Berlin: De Gruyter Mouton.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and H. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Sperber, D. and D. Wilson. 1995. *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Blackwell.
- Stenström, A.-B. 1986. "What Does *Really* Do? Strategies in Speech and Writing." In T. Gunnell and I. Bäcklund (eds.), *English in Speech and Writing: A Symposium*, 149-204. Stockholm: Almqvist & Wiksell International.
- Wilson, D. and D. Spencer. 1993. "Linguistic Form and Relevance." *Lingua* 90, 1-25.